

異文化共存の土地をたずねて

西山教行（経済学部）

9.11のテロはメディアにさまざまなディスクールを生み出した。「文明の衝突」や「十字軍」「聖戦」がまことしやかに取りざたされ、キリスト教を掲げる西洋世界とイスラームに文化的アイデンティティを求める非西洋世界が対決するといった二元論的世界観にメディアは翻弄されたようだ。

異文化の共生や諸宗教の共存は歴史の教訓である。昨年10月に「外国語ならびに第2言語としてのフランス語教育史国際学会」での研究発表のために訪れたイタリアのパレルモは、キリスト教とイスラーム共生の模範となる土地であった。

歴史をひもといてみると、シシリア島第一の都市パレルモは、フェニキア人に建設され、その後ローマ人の支配を受け、ビザンティン帝国の版図に編入され、さらに9世紀にはムスリムの占領するところとなった。そして、11世紀にはキリスト教徒ノルマン人の統治下に入るなど、地中海を囲むさまざまな文化の出会いの場としてたぐいまれな役割を果たしてきた。

写真右手に見えるサン・カタルド教会は、ノルマン人がその統治時代にアラブ人石工に造らせたアラブ・ノルマン様式の教会である。写真からは見えにくいですが、ムスリムの石工たちは、モスクさながら、教会の屋根に三つの円形ドームをこしらえた。これはアラブ文化とノルマン人の宗教の出会いであり、混淆する宗教の軌跡とも、イスラーム文化とキリスト教文化の共存の証とも映る。

異文化の邂逅から生まれた文化資産は人類の過去の遺産として輝くだけではない。ともすればグローバル化が他者の異文化を排除し、ただ一つの価値観を地球規模で席卷することに満足しがちな時代にあって、混淆する文化こそ私たちのたどるべき将来を展望させるものではないだろうか。

19世紀に創立のパレルモ大学で開催された会議も、地中海世界の多文化性を照らし出すという点で、参加者の思索を実り豊かなものとした。今回の学会は「地中海におけるフランス語教育の歴史」をテーマとし、1918年のヴェルサイユ条約にいたるまで世界語の地位を占めていたフランス語が、地中海沿岸諸国や地域にどのような相互作用を生み出したかを検証するものだった。私は「地中海におけるピエール・フォンサンの言語帝国主義」と題する報告を行い、植民地支配に定められた19世紀末のアルジェリアにおいてフランス語普及がどのような植民地政策と連携して実施されたのかを言語帝国主義という視点から検討した。

多文化空間を開かれた場とし、混淆する文化の豊かさを学ぶ旅を、わたしたちはしばらく続ける必要があるかもしれない。